

山王七社の形成

菅原信海

一

山王七社つまりこの場合、上七社は一體どのようにして、いつ頃形成されたのであろうか。確實な史料で、その點を確かめてみなくてはならない。山王神道關係の史料もその原典批判が必ずしも完全になされているとは限らない。特に山王神道關係を含む中世の文獻は、充分な史料批判をなした上でなくては、確實な證據としては利用できないのである。そこで小論においては、確實な史料として客觀的に認められるものを用いて、考説を進めることとしたい。ところで、山王七社の成立について、最近佐藤眞人氏の論考が現われた。⁽¹⁾この論考について賛同する點もあるが、若干首肯し難いところもある。些か拙稿を草する所以である。

山王七社の形成（菅原）

二

山王七社形成以前の山王神に關する神祇關係の事項について考えてみると、まず『古事記』上に、「大山咋神、亦名山末之大主神。此神者坐^三近淡海國之日枝山、亦坐^三葛野之松尾、用^三鳴鏑^二神者也。」とあつて、大山咋神が日枝山即ち比叡山に鎮座しているという傳承があつて、大山咋神が比叡山の地主神とされていた。しかもこの大山咋神は、葛野の松尾にも鎮座している。つまりこれは京都の松尾大社のことで、比叡山の神と松尾の神とは同神であることが知られる。その後、傳教大師登山以前の比叡山は、神佛習合の靈山であつたように、それは『懷風藻』所載の麻田連陽春の詩によつても推測される。この詩は、「和^下藤江守詠^二裨叡山先考之舊禪處柳樹^一

之作」と題するもので、麻田連陽春が藤江守の詩に唱和したもので、二聯の詩からなっている。藤江守とは藤原近江守仲麻呂のことで、先考の舊禪處とは仲麻呂の父武智麻呂の舊跡で、武智麻呂もやはり近江守であったので、その在任中に山上に登つていて、その頃の宿舍が禪處といわれていることから、寺の存在を想像させる。更に仲麻呂の詩中には、比叡はこれ神山とあることから、叡山はすでに神佛習合の靈地であつたようである⁽³⁾。

傳教大師最澄の山王信仰については、『叡山大師傳』に、叡山の神宮禪院にて悔過讀經したことが記されている⁽⁴⁾。また『長講法華經願文』の大師親撰とされる先分には、「比叡山王」「大比叡山王」の語がみえ、山王信仰の態度が窺われる⁽⁵⁾。山王信仰以外では、宇佐八幡宮・香春神宮寺または住吉大社への參詣が伝えられている。

慈覺大師圓仁の山王信仰については、『慈覺大師傳』にも特に記すところはない。ただ赤山明神のために禪院を造るべきことを遺言していることはいまでもない⁽⁶⁾。圓仁の弟子惠亮は、貞觀元年(八五九)八月二十八日に延曆寺に年分度者二人を賜うよう上表している⁽⁷⁾。この時の度者は、賀茂神・春日神について賜わつたものであつて、山王神のためではなかつ

た。

三

智證大師圓珍は、山王權現に對しての信仰が篤かつたよう⁽⁸⁾で、三善清行の『智證大師傳』によると、承和十三年(八四六)十月松尾明神社において發願して、毎年五月八日と十月八日とに、比叡明神社頭において、法華經・佛名經など大乘經典を講ずることを約束しており、十月八日に始めてそれを修していると記している⁽⁹⁾。また山王明神は、圓珍に入唐を勸めており、嘉祥三年(八五〇)春、夢に現れて、入唐求法の志を遂げさせようとした⁽¹⁰⁾。また貞觀二年(八六〇)には、大宮・二宮・聖眞子の三權現の授戒、そして法宿・華臺・聖眞子の法號授與のことが、『園城寺傳記』一にみえる⁽¹¹⁾。そして仁和三年(八八七)三月十四日に、大比叡・小比叡二神のために、延曆寺に年分度者二人を賜わよう上表し、勅許されている⁽¹²⁾。ところで山王三聖つまり大宮・二宮・聖眞子の三權現の信仰は、圓珍にはじまるようであつて、それは貞觀二年の三聖に對する授戒と法號授與のことや、仁和四年(八八八)の『垂誠(制誠文)三條』の第一條に「大小比叡山王三聖」に對する信仰の必要性を述べており、同年撰の『佛說觀普賢

菩薩行法經文句合記』卷下の跋文には「先以奉⁽¹³⁾嚴 兩處三聖一 早洗⁽¹³⁾權現 六根五塵」とあり、これらはいわゆる山王三聖という文言の初出でもあり、三聖信仰のはじまりでもある。また寛平三年(八九一)十月二十八日の遷化の前日に弟子達に遺された『遺制十一ヶ條』の第五條に「地主三聖」と山王三聖のことをいっていると思われる語がみえるが、この『遺制』は圓珍の親撰ではないとされている⁽¹⁴⁾。しかしともかく山王三聖に對する信仰は、圓珍の頃から盛んになったことは確か⁽¹⁵⁾なようである。

『三代實錄』によると、貞觀元年正月二十七日に、從二位勳⁽¹⁶⁾一等比叡神に正二位、無位の小比叡神に從五位の敍位があった。この比叡神は恐らく大比叡神をさすものと思われる。即ち元慶四年(八八〇)五月十九日には「奉授⁽¹⁷⁾正二位勳一等大比叡神正一位、從五位上小比叡神從四位上。」とあって、正二位の大比叡神に正一位を、從五位上小比叡神に從四位上を授けているから、比叡神は大比叡神であることが判る。これでも知られるように、大比叡・小比叡の二神にのみの敍位で、聖眞子權現の名はみられない。聖眞子が加わって三聖が揃ってみえるのは、貞觀二年の上記の授戒と法號授與からで、次いで貞觀九年(八六七)正月十四日の『沙門壹道記』で

ある。慈覺大師圓仁が如法經の守護神として、十二日間つまり子日から亥日までの十二支に配當した各日に諸神を配しているが、その未・申・酉の日に三聖が當てられている。即ち「八番未日 大比叡大明神 九番申日 小比叡大明神 十番酉日 聖眞子大明神」とある⁽¹⁸⁾。ともかく平安前期には、山王二所及び山王三聖の信仰が盛んに行われ、特に三聖信仰は圓珍によって創始されたものと考えられるようである。

四

ところで、山王七社の形成について論を進めて行くことになるが、佐藤説についてその要點を示すと、次のようになる。

まず日吉山王に關する最古の緣起である『日吉社禰宜口傳抄』についての再検討では、本書の成立年代について精査した結果、鎌倉時代以降の僞作であることを推論している。つまり、弘安二年(一二七九)正月以降の成立と考えるのが妥當ではなからうかとする。それは十禪師宮に關する記事の中で、賀茂中社の田に賀茂神が苗を植えたところ、俄にして槻の木になったという傳承をとり上げて、この話は、『阿婆縛抄』卷二百「諸寺略記」上の善峰寺の條にみえる八尺千手觀

音像の由來が、祖型とみられる奇瑞譚であるとする。この「諸寺略記」上は、その奥書によれば弘安二年の成立であるから、『口傳抄』の成立は弘安二年を溯りえないとするのである。『口傳抄』の記事内容について、その疑わしいことは、多くの先學によって既に指摘されてはきたが、いま論者によって精緻な検討がなされ、その成立年代を弘安二年以降とするなど大きな成果がえられたといえる。

かくして、論者は山王七社の成立問題に論及し、(1)まず山王三聖の成立を慈惠大師良源の座主時代、即ち十世紀末頃としている。しかしこれは後に修正し、智證大師圓珍自筆の仁和四年の『制誠文』(又は『垂誠三條』)が存していることから、仁和四年以前に山王三聖のいわゆる三社體制が整っていたとしている。ついで他の四社について、その成立年代に關する『日吉社禰宜口傳抄』・『山王緣起』・『山家要略記』などの創始勸請説は、そのまま信じ難い説であつて、いま正確な創祀年代を知ることが困難であるとし、この四社各社の史料上の初見を示している。(2)八王子社は、藤原忠實の『殷曆』十二、天永元年(一一一〇)三月六日の條の「南圓堂、日吉八王子御前ニ始祈、長日祈也。」の記事において、はじめてみられるとする。(3)そして客人・十禪師・三宮の三社について

は、「僧西念願文」にみえる「奉讀誦大般若經目錄」に、日吉七社に對する大般若經八部讀誦のことを載せ、「一部一宮 一部聖眞子 一部客人宮 二部十禪師 一部二宮 一部八王子 一部三宮保延六年三月九日甲申發願、同十九日甲午日結願。」とあるので、客人・十禪師・三宮は保延六年(一一四〇)には既に祀られており、なお日吉七社も成立していたことが判るとする。このうち(4)客人宮は、『耀天記』や『古事談』第五などに、日吉社の宮籠法師廣秀が、慶命座主の時代に私的に勸請した社であつたと説かれており、これによると慶命の座主在職期間である萬壽五年(一一二八)から長曆三年(一一三九)に客人宮は創祀されたと考えられるという。

かくして、(5)山王七社の成立年代の上限は、慶命が座主に補任された萬壽五年に求められるとする。そして下限は『耀天記』の「御興次第」によつて、七社の神興が全部出揃うのは、最後の三宮の神興が現われた永久三年(一一一五)であることから、七社の成立下限年代をこの永久三年とし、更に時代を下げて、保延六年の「僧西念願文」の頃には、七社の存在を疑う餘地はないと論ずる。ただ、成立の上限を客人宮の勸請された慶命座主の在職期間としているが、上記のように三宮の創祀年代が確證されえないことから、少しく無理

なのであって、成立の上限は決め難いようである。

五

さて、確かな史料にみえる山王七社各社の初見年代を、果して論者の考究した年代として信すべきか、どうか、問題は更にこの點の検討に入らなければならない。

まず山王三聖つまり大宮・二宮・聖眞子についてであるが、その大宮權現の鎮座について、『耀天記』の「大宮御事」に兩説ありとして、一つは康和五年（一一〇三）十二月の愛智庄官符を引いて「御神者、大八島金刺朝廷、顯三輪明神、大津御宇之時、初天下坐^{云々}」⁽²²⁾といひ、金刺朝廷即ち欽明朝に大三輪明神として顯われ、大津御宇即ち天智天皇の時に、叡麓に垂迹したとしている。この説は大江匡房の撰という『扶桑明月集』に説くところで、同書に、「人皇三十代磯城島金判官欽明天皇即位元年^{庚申}大和國城上郡大三輪神天降。第三十九代天智天皇大津宮即位元年^{壬申}大比叡大明神顯座。」⁽²⁴⁾とある説と同じで、むしろこの『扶桑明月集』を典據としている。ところで、欽明天皇の時に大三輪神として天降り、天智天皇の時に、叡麓に垂迹したということは、縁起としてはふさわしい話であるが、史實としては勿論認め難いことである。

山王七社の形成（菅原）

る。

他の一つは、大宮權現は鳴鏑明神で、下賀茂の神の夫君で、上賀茂の父君であるという。即ち、同書に次のように記す。

大宮ト申ヘ、即鳴鏑ノ明神ト申也。是賀茂社下宮ノ夫神ニテ御ヌ也。下賀茂ト申ヘ、松尾明神ノ御娘也。大井河ノ末ニ、松尾ノ前ノ流出テ、川ノ邊ニテ物ヲ洗ラヒ給ニ、鏑矢ノ流レ下ルヲ取給テ、松尾ノ家ニ歸テ、寢所ノ垣ニサシ置キ給ヨリ、懷妊シテ產子ヲ給之刻ミ、其鏑矢鳴テ、丑寅ノ方ヘ虛ニ飛登テ、鳴リ渡リ畢ヌ。其後松尾明神アヤシミ給テ、其御子三歳ニ成給フ時、在地ノ人々ヲ請居テ、三歳ノ子ヲ座中ニ懷出テ、酒器ヲ取出テ、我父ト思食サム人ニ指給ベシ。父無シテ妊ミ給事無シ。又在地ノ人離テハ、女子ハ誰ヲカ夫トスベキト宣給ニ、此三歳ノ小兒、誰々ニモ酒器ヲ不差シテ、龍ト成テ空ヘ飛ビ登リ給ヌ。仍別雷明神ト申、是上ノ賀茂ノ社也。下ノ宮ニハ大祖ノ明神ト申。是松尾ノ一女。其夫明神ト申ヘ、大宮權現、即鳴鏑明神ト號ス。其箭ヘ、大宮ノ勝地ニ落付畢ヌ。⁽²⁵⁾

大宮權現は姿を鏑矢にかえて、川の流れにしたがって下賀茂の神の前に現われた。下賀茂の神は松尾明神の娘である。

拾われた鎬矢を松尾の家に持ち歸つて寢所に置いたところ、懷妊して一子を産んだ。その時、この鎬矢は鳴つて東北の方向へ飛び去つて行つた。これが鳴鎬明神と號される即ち大宮權現であつて、しかも松尾明神の女下賀茂神の夫で、上賀茂の祭神別雷神の父であるという。

ところで、⁽²⁶⁾神婚譚には有名な大三輪の祭神大物主神の神婚の話があり、この賀茂の神婚譚も同巧異曲である。『釋日本紀』卷九所引の『山城國風土記』逸文、可茂社の條に、丹塗矢の神婚譚がみえる。

玉依日賣、於石川瀬見小川、々々遊爲時、丹塗矢、自川上流下。乃取插置床邊、遂孕生男子。至成人時、外祖父建角身命、造八尋屋、豎八戸扉、釀八腹酒、而神集々而、七日七夜樂遊。然與子語言、汝父將思人、令飲此酒。即舉酒坏、向天爲祭、分穿屋簷、而升於天。乃因外祖父之名、號可茂別雷命。所謂丹塗矢者、乙訓郡社坐火雷神。

とあつて、丹塗矢は乙訓郡の社に坐す火雷神としてゐる。『本朝月令』にも「秦氏本系帳」の文として同様の話を載せてゐる。即ち、

初秦氏女子出葛野河、澣濯衣裳。時有一矢、自_レ上流

下。女子取_レ之還來、刺置於戸上。於是女子無_レ夫姪、既而生_二男子_一也。父母恠_レ之、責問。爰女子答曰、不知。再三詰問、雖經日月、遂云不知。父母以謂雖然無_レ夫而無_レ生子之理也。我家往來近親眷族、隣里鄉黨之中、其夫應_レ在。因_レ茲辨備大饗、招集諸人、令_二彼兒執盃_一。祖父母命云、父止思人爾可_レ獻_レ之。于時此兒不_レ指衆人、仰觀行指_二戸上之矢_一、即便爲_二雷公_一、折_二破屋棟_一、升_レ天而去。故鴨上社號_二別雷神_一、鴨下社號_二御祖神_一也。戸上矢者松尾大明神是也。

⁽²⁸⁾とあり、この話では戸上矢は松尾明神の化したものとされ、そして丹塗矢にしても、戸上矢にしても、共に鳴鎬矢と同じであるのは疑問の餘地はなからう。

ここで思い出されるのは、上引の『古事記』に「大山咋神者、……用_二鳴鎬神者_一也。」とある「用_二鳴鎬神_一」のことである。本居宣長は『古事記傳』で、「用ノ字は、成字又は化などの誤か」といい、「鳴鎬爾那理坐流神那理」と訓んでゐる。⁽²⁹⁾とすると、大山咋神は鳴鎬神であることになり、日枝山つまり比叡山に鎮座する神、いわゆる二宮權現に比定される神も、また葛野の松尾に坐す松尾明神も共に鳴鎬神であることになる。そうすると、大宮權現を鳴鎬神と説く『耀天記』

の説と矛盾してくる。

ともかく、これらの傳承はやはり『耀天記』でいう二つの説、即ち一つは大宮權現を大三輪明神の垂迹とみる説と、もう一つは鳴鑄神とみる説とに大別されるようである。これは、貞觀元年の惠亮による賀茂神・春日神のための年分度者の下賜と、仁和三年の圓珍による大比叡神・小比叡神のための年分度者の下賜とによって推測されるように、大宮權現を鳴鑄神つまり賀茂神とする惠亮の西塔派と、一方大宮權現を大三輪明神とする圓珍の東塔派との神祇觀の相違であらうと思われるが、後考を俟ちたい。⁽³⁰⁾ともかく、これらの説話は、大宮權現の緣起譚ではありうるが、垂迹鎮座の確かな史料とはなり難い。

二宮・聖眞子の鎮座についても同様なことがいえる。二宮は上記の『古事記』にみえるように、比叡山に鎮座した大山咋神が、叡山の地主神として崇められた神である。後に大三輪神が勧請され、大三輪神が大比叡神即ち大宮とされたため、地主神である大山咋神は小比叡神即ち二宮と稱されるようになったのである。⁽³¹⁾『扶桑明月集』では、二宮は國常立尊であるといっている。そしてその鎮座の年代を天地開闢の時としているので、このままでは信ずることができない。また

山王七社の形成（菅原）

聖眞子についても、同書に應神天皇の御代に天降り、欽明天皇三十二年に宇佐八幡神として顯われ、天武天皇元年に近江國滋賀郡即ち叡麓と思われるところに垂迹したと説かれているが、⁽³²⁾これも信ずるに足らない。傳慈覺大師圓仁撰の『神祇鑑典』には、聖眞子は正哉吾勝速日天忍穗耳尊の垂迹であるとしているが、これも根據があつてのことではない。とすると、二宮・聖眞子の垂迹年代も共に明確ではないのである。

そこで、山王三聖についてであるが、上述したように智證大師圓珍の仁和四年の『垂誠三條』及びやはり同年の『佛說觀普賢菩薩行法經文句合記』卷下の跋文に、山王三聖に對する信仰がみられるのであり、更には溯つて貞觀二年に山王三聖に對しての授戒、法宿・華臺・聖眞子などの法號授與のことが、『園城寺傳記』卷一にみえていて、山王三聖信仰は圓珍の頃からはじまったものと考えられる。

ところで、この三聖の社殿が整うのは、相應和尚の頃である。『耀天記』に、「兩所三聖ト常ニ申事如何。……口傳云、兩所ハ二宮・大宮也。サテ聖眞子ハ、本大宮ノ築垣ノ内ニ御ケル也。大宮モ聖眞子モ、神殿ハイト大ナル事ナシ。然ルニ無動寺建立ノ大師相應和尚ノ御時、大キニ五間ニ大宮ノ神殿ヲ作ラルル

間、又聖眞子ヲ東へ遷シ奉ル故ニ、二宮・大宮・聖眞子、各別事外ニ廣大ニ成リ給間、其後兩所三聖ト呼タテマツル也云々。⁽³³⁾とあつて、聖眞子のもと大宮の築垣の内に祀られていたが、相應和尚の時に、大宮は五間の神殿となり、聖眞子は大宮の東に遷つて獨立することになった。即ち相應和尚の時、既にあつた二宮と併せて三聖の神殿が整備されたのである。

相應和尚の時とは、一體いつかというところ、『相應和尚傳』に「寛平二年……法宿大菩薩託宣云、⁽³⁴⁾如小比叡寶殿爲我可造寶殿。不經幾日造立。」とあつて、寛平二年（八九〇）のこととしている。二宮の社殿は同じく『相應和尚傳』によると、仁和三年（八八七）に「造立華臺大菩薩寶殿一字」とあつて、寛平二年以前に建てられている。そして大宮の社殿より大きかったため、此度は寛平二年に大宮の社殿を改築していることの來由が知られるのである。しかも仁和三年には、大宮の社殿の存在も確かめられる。即ち『相應和尚傳』に「三年丁未、於大宮御社前、造立率都婆一基、納法華經一部。」とあり、⁽³⁶⁾大宮社の前に率都婆が建てられたことが記されている。以上のことから、仁和三年即ち圓珍在世の頃に、山王三聖信仰のもとに三聖の社殿が建てられていたことが確認される。

六

さて、山王七社のうち三聖以外の他の四社の成立についてみると、まず八王子權現について、『扶桑明月集』や『神祇宣令』に記す垂迹譚は、⁽³⁷⁾勿論史實ではない。八王子社の神興が造られたのは、座主源心の時で、しかも後冷泉天皇の天喜年間（一〇五三～五八）のこととしている。時恰も入末法時の永承七年（一〇五二）の翌年以降に當り、世情不安定なときでもあつた。即ち『耀天記』の「御興次第」によれば、「聖眞子・八王子・客人宮、以上三社、西明房座主源心時、始造進御興。依有御託宣也。⁽³⁸⁾四至内目代良運造之。後冷泉院御宇天喜比也。」とあつて、八王子の神興ばかりでなく、聖眞子・客人宮の神興も同じ頃に良運によって造られていることが判るのである。源心座主の在職年代は、永承三年（一〇四八）から天喜元年（一〇五三）の間であり、しかもこの文に後冷泉院の天喜の比とあることから、造進の年時は自ら天喜元年と限定されてくる。つまり、八王子神興の存在は、天喜元年には確認できるようである。

そして、この八王子の神興は、客人・十禪師の神興と共に、強訴のための西坂本に昇ぎ出されている。これは『天台

座主記』によれば、嘉承三年（一一〇八）三月三十日のことで、京都の尊勝院の灌頂阿闍梨任命についての訴えであった。「同（嘉承）三年^{子戌}三十日。山^{大衆}昇^{日吉}八王子・客人・十禪師宮神輿^群下^{西坂}本^{武士防}之、不^奉入^{鳳城}。是爲^訴申^{尊勝寺灌頂東寺延曆園城次第}可^被請^{之由}也。四月一日、蒙^{裁許}歸山。」とあって、四月一日の裁許で、延暦寺の阿闍梨範胤が叡山側としてはじめて阿闍梨宣下を受けたため、神輿は歸山した。ところで、『百鍊抄』巻五では、「三月廿三日、山大衆爲^訴灌頂阿闍梨事^群下。公家遣^{廷尉武士等}不^令入^京。卅日、捧^{神輿}下^洛。蒙^{裁許}歸山。」とあって、神輿動座を三月三十日とはせず、二十三日のこととし、また神輿の歸山を四月一日ではなく三月三十日のこととしている。

八王子社そのものが確かめられるのは、中納言右大臣藤原宗忠の『中右記』巻三においてであって、嘉承三年三月二日の條に、

今日有奉幣日吉一社也。……是日吉社言上。二月六日卯時八王子社上犬登動神殿事。同日丑刻同社鳴事。七日同社寅刻二度鳴事。九日同社戌時犬四登食合、同動神殿及舞殿事。如此恠異及四ヶ度。仍前日源大納言^{實俊}行野郎御

山王七社の形成（菅原）

卜處。官寮卜申云、或神事穢氣不信、恠所口舌鬭爭。⁽⁴⁾とあって、二月六日から九日にかけてのこととして、八王子社の社殿に犬が登ったために、社殿が鳴動したことを記し、恠異四度に及んだことがみえており、また奉幣のことについても、同記にはまた「日吉幣、御前一捧之外、八王子新相加也。」とあって、日吉一社だけでなく、八王子社にもこのとき加えられたことが窺われる。日吉一社とは、大宮・二宮・聖眞子の三聖をまとめていっていると思われるが、八王子社は牛尾山（八王子山）の山頂に祀られていて、山麓の日吉社と區別してみられているがためと、この社殿鳴動の恠異事件によって、八王子社への奉幣が別に行われたのではなからうか。このようにみると、八王子社は『殿曆』の天永元年四月の記事以前に、八王子社の存在を確認することができ

七

客人社については、『扶桑明月集』の「桓武天皇即位延暦元年天降」とするのは根拠がないが、「八王子麓白山妙理權現顯座」といっているのは、ある事實をふまえてのことで、それは既に觸れたように『耀天記』の「客人宮事」に記され

ている宮籠廣秀法印がはじめて奉崇した白山權現と考えてよいようである。即ち同書には次のように記している。

昔宮籠廣秀法師初奉崇之。其濫觴者、彼廣秀年來參詣白山、而年老力疲不能參詣。爰祈願云、我數十年之間、參詣不怠、然而於今者老屈之間、不能參詣云々。爰夢想云、我聖眞子東勝地可崇。サテ其砌以參詣、可存白山參詣之由也云々。仍奉崇之。而無動寺慶命御時、私奉崇者也。⁽⁴²⁾

この客人宮の創祀年代は、無動寺系の座主慶命の時で、慶命が座主職にあつた萬壽五年（一〇二八）五月十九日から、入滅の長暦二年（一〇三八）九月七日までの十年間の中と考えてよいようである。『耀天記』には續けて、次のような話を載せている。

件座主ニモ不令申奉崇之際、座主參社之時、奉見件寶殿。被仰云、此寶殿ハイツヨリ奉崇哉。社司申云、組承候へ宮籠廣秀法師所ニ奉崇也云々。重被仰云、此條无謂事也。如此宮籠等任雅意奉崇者、寶殿不知其數歟。慥可ニ壞弃也云々。仍社司等欲ニ壞弃之處、重被仰云、今日計可ニ相待也。今夜致三祈念、明日可ニ左右云々。翌日又參社。奉拜ニ客人寶殿之處、件寶殿上雪一

尺計積^リ。于時七月云々。座主示云、參集諸人見此雪否。

答云、不見。爰座主住ニ奇特念、自今已後者、我門弟等、偏以此社ニ可奉崇也云々。⁽⁴³⁾

即ち、廣秀法師が勸請した客人社の存壞をめぐる、座主慶命が壞弃の決定を下そうとした時、七月というのに、客人社の寶殿の屋根に雪が一尺許積るといふ奇瑞が起つた。客人神が示した奇特の念によつて、客人社は存續し、諸人の奉崇するところとなつたとある。同様の話は、『古事談』にも「日吉客人宮者白山權現云々。依或人夢想、造小社、所奉祝居也。而慶命座主之眊、無指證據者、无詮小社也。又可御坐者、可被示不思議云々。件夜入座主之夢、有託宣之旨等。後朝小社上許、白雪一尺許積タリケリ。六月云々。其後靈驗揭焉云々。」と記されていて、その内容は大同小異であるが、雪が積つた事件の月が七月でなく六月であるという差異はみられる。

このようにみえてくると、客人社の存在は座主慶命以前つまり萬壽五年以前には溯りえないことになり、更には『檢封記』に、「奉崇白山靈神、名客人權現。是相應之所爲也已上。裏云、當社奉崇其夜、甚雪俄積當社之上、於餘所無其義也云云。于時天安二年六月十八日也。」と記すところ

ろの客人社は、天安二年（八五八）六月に相應和尚によって祀られたとされているが、これは慶命が無動寺系であるため、無動寺開祖の相應和尚に創祀の名を假託したものであろう。

この『檢封記』は、相應和尚の撰とされているが、實は疑わしい。客人社の相應創祀説は、そのことが『相應和尚傳』にみえないことや、『耀天記』や『古事談』に、天安二年相應創祀説をとらなかつたことなどによって論證されることである。即ち客人社の創祀は、萬壽五年から長曆二年の間とみるのが妥當のようである。

客人宮の神輿は、上引の『耀天記』の「御輿次第」に、聖眞子・八王子の神輿と同時に造られており、その建造年代は座主源心の時で、しかも後冷泉院の御宇ということ、天喜元年に造進されたことが確かめられる。ということは、客人社の創祀された萬壽五年以後、また天喜の頃にも客人社の存在が確認されるのである。更に、客人社の神輿は、『天台座主記』によると、嘉承三年の強訴の時に、八王子・十禪師宮の神輿と共に昇ぎ出されていることが知られる。

八

十禪師權現は、『扶桑明月集』によれば、「桓武天皇延曆二

山王七社の形成（菅原）

年天降」とあるが、⁽⁴⁶⁾勿論このまま信ずることはできない。また『神祇宣令』『嚴神鈔』には、⁽⁴⁷⁾十禪師を天照太神の孫瓊々杵尊の垂迹としているが、これはいうまでもなく、祭神を權威づけるためになされたことであることは言を俟たない。

江戸時代の慈本の『一實神道記』には、十禪師權現は光仁天皇を祭神とする⁽⁴⁸⁾とあるが、これは光仁天皇の寶龜三年（七七二）から十禪師の制度がはじまったがためであるとしている。『日吉社禰宜口傳抄』に、「小比叡別宮三座。……曰樹下宮、又曰十禪師宮。件名者、寶龜年中、内供奉十禪師之延秀、於香積寺蒙神託、造小比叡別宮。」とあって、⁽⁴⁹⁾十禪師宮（小比叡別宮）は、光仁天皇の寶龜年中の創祀であるとする説をうけているものであろう。⁽⁵⁰⁾この『口傳抄』の説は、『耀天記』の「十禪師宮事」の條に、「成仲説云、中古横川ノ香積寺十人供僧中ニ、一人智行兼備高德人在シテ、十禪師中其一人、現身山王語言申通スル人、荒人神成給ヘリ。仍十禪師申也。」とある説にもとづくものであり、⁽⁵¹⁾ここにみえる香積寺は、『山門堂舍記』に引く『明達律師傳』によって知られるように、昌泰三年（九〇〇）明達律師によって命名されたもので、⁽⁵²⁾光仁天皇の寶龜年中の創祀とする説は信ぜられない。

そこで、他の史料によつて検討してみると、『天台座主記』嘉承三年三月三十日の條に、既に引用した強訴のことが記されておゐり、そこに八王子・客人の神輿と共に、十禪師の神輿も昇ぎ出されていることが知られる。⁽⁵³⁾ところが、『耀天記』の「御輿次第」の條に、十禪師の神輿について、「十禪師御輿始、鳥羽院御宇天仁二年四月廿二日。十禪師始御乘輿、同院御宇。」とあり、⁽⁵⁴⁾天仁二年（一一〇九）にはじめて造られたといっている。しかし強訴のあつた嘉承三年即ち天仁二年の前年に、十禪師の神輿があつたことは、『耀天記』の記事と齟齬するが、ただこの頃に十禪師の神輿が造られていたことだけは確かなようである。

十禪師權現信仰は平安末頃から盛んになり、その靈威は驚くべきものがあつたようで、『日吉山王利生記』にその靈驗譚が残っている。同書第三に、志賀僧正明尊が祈禱している時に、十禪師が現われた話を載せている。

明尊僧正、……或時病者を祈精したてまつりける勸請の懇念にこたへて、山王六社はくだり給て、十禪師ばかりなを現じ給はざりければ、彌行業の薰修をいたして、一期の信力をつくしけるに、下給て詫宣して云、吾山三塔九院の房を見めぐりつるに、源信・覺運よりあひて、三

諦相即の法文を談じつるを聽聞しつる程に、時刻うつりてけり。談議の趣ただ易解の三諦也。圓融の三諦にはあらずとぞ仰られける。

⁽⁵⁵⁾と、ようやく出現した十禪師權現は、源信と覺運とが三諦相即のことを議論しているところに出遇い、時刻の經つのを忘れてしまつた話が記されている。

この明尊僧正は、三井寺の僧で小野道風の孫に當たる。

『元亨釋書』卷四・卷三十黜爭志・『天台座主記』・『寺門傳記補錄』卷十三の明尊の傳などによると、⁽⁵⁶⁾長暦二年（一一三九）に智證門徒は明尊を天台座主に推したが、慈覺門徒のため反對され斥けられている。この頃、山寺兩門の争いのため、園城寺の僧が叡山の戒壇に登り受戒できないので、長暦三年（一一四〇）明尊は上書して園城寺に戒壇を設立することを願ひ出ているが、これも山門の反對にあひ實現しなかつた。

寛徳二年（一一四五）園城寺の長吏となり、永承三年（一一四八）天台座主に補せられたが、山門側に容れられず、數日にして任を辭している。かくて康平六年（一一六三）九十三歳で遷化している。⁽⁵⁷⁾なお恵心僧都源信は、寛仁元年（一一〇七）七十六歳で入寂しており、覺運は寛弘四年（一一〇七）に五十五歳で滅しているから、覺運の入寂の年は、明尊の三十七

歳に當たる。『利生記』の話が事實を傳えているとするならば、十禪師信仰は、早く寛弘四年頃には現われているとみられよう。また一步譲っても、明尊の在世中には、十禪師信仰があったとみて差支えはないようである。

『日吉山王利生記』には、明尊の話のほかに、卷四には近江守なる者の母についた邪氣が、十禪師の業であるといわれ、叡山東塔北谷の成陽が、その邪氣を拂い除き病を癒した話が記されている。⁽⁵⁸⁾ また同じ卷四に、叡山横川戒心谷眞蓮坊の房主香象坊という法華堂衆の弟子妙音房という貧しい行者の話を載せている。それは悪左府つまり藤原頼長の瘡病を癒すため、十禪師の寶前にて、千日の法華經讀誦を修すべしとの託宣をうけて、その行を修して頼長の歸依をえた話である。⁽⁵⁹⁾ 同書卷六に、大納言藤原成通卿が病の時、湛秀已講なるものが、大般若經を讀誦して病氣平癒を祈願している時に、十禪師が現われて、十禪師の教示つまりここでは物忌をすることによって、病氣を癒すよう努力した話がみえる。⁽⁶⁰⁾ この成通卿は十二世紀前半に活躍した公卿であるから、前の話と同様にこの頃十禪師信仰が、公卿社會にも入り込んでいたことが窺われる。同じ卷六に、日吉社への百日詣をする僧の話があって、そこには十禪師の託宣によって、憐みの心を起した

山王七社の形成（菅原）

僧が、死穢も畏れず信心に勵んだことが述べられている。⁽⁶¹⁾ この話の年代は明らかではないが、平安末期のことと考えられる。ところで、この十禪師信仰は、慈圓によって元仁元年（一二二四）に創始された新禮拜講により、確立され盛んになって行った。⁽⁶²⁾

三宮については、『扶桑明月集』に桓武天皇の延暦六年に、八王子山の大巖の傍に手に法華經を持して、天降ったと記しているが、勿論これも傳承として記されているものである。⁽⁶³⁾ 史料上でその存在が確かめられるのは、『耀天記』の「御興次第」で、「三宮御興始、永久三年（一一一五）四月廿一也云々。」とあるのが初見である。⁽⁶⁴⁾ この史料以外には、その創祀を知る材料はないようである。

九

ところで、日吉山王七社が揃ってみられるのは、『天台座主記』の保安四年（一二三三）の記事で、七社の神輿が強訴のため、京都に昇ぎ込まれた事件においてである。

（保安）四年卯癸七月四日、山上大衆入無動寺、伐拂大乗坊、追却山門。是依越前守忠盛朝臣之訴、被妨寺家所司、應好於檢非違使廳之故也。同十五日、大衆

振_ニ日吉三社_ハ王_子客_神興_一下_ニ向坂下。武士防禦不_レ奉_レ入_ニ洛中_ニ之間、同十八日、重奉_レ下_ニ四社_大宮_子三_宮聖_神興_一、大衆與_ニ官軍_一合戰。僧徒多以傷死、遂奉_レ弃_ニ七基_神興_於河原_一、遁去_了。⁽⁶⁵⁾

この神興振りを防いだのは、平忠盛・源爲義らであつて、この頃源平兩氏の武士が力をもつて、政治の表面に登場してくるのである。保安四年の強訴は、美濃國中川御厨を山門領に加えることに、無動寺大乘房出身の座主寛慶が應じなかつたために、大衆が無動寺に亂入したことに端を發している。そしてこの強訴には七社の神興が揃つて昇ぎ出されたことが知られる。そしてまたこの事件は、『百鍊抄』卷五の保安四年七月十八日の條にも記されている。⁽⁶⁶⁾

更に、七社の社殿が存したことは、保延六年（一一四〇）の「僧西念願文」によつて確かめられる。即ち、

一、奉讀誦大般若經目錄

四部 長門國轉讀 三部 越前國氣比宮轉讀

奉日吉七社宮讀誦八部内

一部一宮 一部聖眞子 一部客人宮 二部
十禪師 一部二宮 一部八王子 一部三宮

保延六年三月九日甲申發願、
同十九日甲午日結願、

都合并十五部

とある。⁽⁶⁷⁾なるほど、この頃には七社夫々の社殿が存在していたと思われ、このことは『天台座主記』の保延六年三月二十八日の條に、二宮・十禪師などの寶殿が焼失したことがみえ、⁽⁶⁸⁾既に仁和三年には確かめられた三聖以外の社殿が確認されるようである。この記事は「僧西念願文」にみえる大般若經轉讀の結願の日、即ち十九日から僅かに旬日を経過した時のことであつて、この『天台座主記』の保延六年三月二十八日の記事に、「未時、日吉二宮十禪師大行事寶殿并拜殿、二宮彼岸所舍屋等拂_レ地焼失。是日二宮彼岸所湯屋失火延所_レ及_ニ此灾_一也。」とあり、また『百鍊抄』卷六にも「（保延六年三月）⁽⁶⁹⁾廿八日、日吉二宮・十禪師寶殿炎上。」と記されていて、二宮・十禪師の寶殿・拜殿のほか、大行事の社殿と二宮彼岸所まで焼けているのである。原因は二宮彼岸所湯屋よりの失火であつた。

この時代には、山王七社は一應整つていたと思われるのであつて、『耀天記』の「山王事」によつても、その七社の神名が確かめられる。即ち、次のようにある。

此兩所大明神ヲ陰陽ノ父母トシテ阿彌陀如來後ニ隱本垂迹シテ、神ト成テ御セバ聖眞子トハ申也。聖人ノ精氣ニテ御ス。

大宮二宮ノアマクダリテ、大宮ハ皆成佛道ノ機ヲ調ヘ、二宮ハ惡業煩惱ノ病ヲヤメ給、……其外ニ八王子・三宮・十禪師・客人ヨリ始テ、自余ノ王子諸神ト申モ、大宮二宮ノ陰陽和合ノ父母ト顯ハレ給レバ、五行ノ子ト成テ和光同塵ノ化ヲタスケ給モ理ナルベシ。⁽⁷¹⁾

この「山王事」は、『耀天記』の中でも成立年代が早い部分で、平安末の一一四〇年頃に成立したものと考えられるから、他の史料と併せ考えても、いわゆる「山王七社」の名のもとに、「七社」の成立をこの頃と推定して大過ないようである。因みに、「七社權現」という語の事例は、この「山王事」の中にみられるのである。

更に、應保二年（一二六二）の「僧嚴成起請文」になると、「日吉山王七社」という語も確立してくるようである。即ち、

維應保二年歲次壬午十月八日辛未吉日良辰撰定立申起請事

僧嚴成

右件起請元者、於自今以後、若酒一坏之外、重坏仕候者、王城鎮守八幡三所・賀茂下上・日吉山王七社・稻荷五所・祇園天神・別石山觀音卅八所之罰、三日若ハ七

山王七社の形成（菅原）

日之内、蒙加ニ嚴成身、毛穴爲無恣、幸今生者可罷過と申、穴賢穴賢、⁽⁷²⁾

と記されていることで、そのことが知られる。『百鍊抄』卷八の治承元年（一一七七）四月十三日の條に、「延曆寺衆徒、相ニ具七社神興ニ參内、欲入陣中ニ之間、武士相防。流矢誤中ニ十禪師神興、未曾有之例也。」とあつて、ここでも「七社神興」と、いわゆる七社の語が固定して用いられている。

建仁三年（一二〇三）、叡山の學侶（學生）と堂衆との争の結果、七社の堂衆が追討されるに及んで、山王七社の守護ができなくなり、代つて叡山の學生を割當てて勤仕することが、院宣によつて決まった。翌四年二月十二日のことで、つまり七社の存在が認められたことにもなる。『天台座主記』に、「（建仁四年）二月十二日、社頭彼岸任ニ谷々巡役、次第宜令勤仕ニ之由、被下院宣^{（青蓮院藏本爲左中辨爲院宣）}是堂衆退散之後、學生勤仕之初也。」と記し、更に青蓮院藏本及び淺草寺藏本の『天台座主記』は、記事を補つて、「仍大宮^{（南谷）}二宮^{（西谷）}聖眞子の『八王子^{（東谷）}改^{（西谷）}客入^{（無動寺）}十禪師^{（北谷）}改^{（東谷）}三宮^{（西谷）}改^{（南谷）}之、經評定、如此雖被ニ定行、北谷相論、欲及合戰之間、今季東塔彼岸皆於山上、令勤仕畢。（下略）」と、七社についての谷配を決めている。この谷配のことは、また『華頂要略』門主傳

第三にも、同様の記事がみられる。⁽⁷⁸⁾

このように、日吉山王七社が形成されて行く過程をみてみると、七社がはじめからまとまった形で同時に成立したとはいえないようで、まずいつの頃に二宮權現即ち小比叡明神が祀られ、そして大宮權現即ち大比叡明神が勧請され、これに聖眞子權現が加わって、三社權現としての山王三聖が形成された。この山王三聖は、智證大師圓珍の頃に成立し、信仰されたと思われる。そして七社のうち他の四社は、夫々の祭神を崇める信者によって勧請され祀られることになったもので、なかでも十禪師信仰は、かなり古く寛弘四年(一〇〇七)頃の志賀僧正明尊の時から確かめられるようである。八王子は天喜元年(一〇五三)、客人は萬壽五年(一〇二八)、三宮は永久三年(一一一五)に、その存立が確認される。

そして、日吉山王七社の七社という數が、北斗信仰を背景に形成されたことは言うまでもない。⁽⁷⁹⁾ この七社が、「山王七社」として揃って史料にみえるのは、『耀天記』の中でも、特に一一四〇年頃の撰と思われる「山王事」の文中においてであって、そこに「七社權現」として七社の神名がでてくる。それは更に論者の指摘する保延六年の「僧西念願文」に

よつても、確かめられるのである。

註

- (1) 佐藤眞人氏「山王七社の成立」『神道學』百二十五號所載を参照。
- (2) 『日本古典文學大系』所收本、p. 110.
- (3) 福井康順先生「傳教大師以前の比叡山」『東洋思想の研究』所收 pp. 180~98.
- (4) 『傳教大師全集』(舊版)別卷、pp. 80~81. 神宮禪院での悔過讀經のことは、『傳教大師行狀』・『傳教大師傳(和文)』・天台座主記などにもみえる。
- (5) 『傳全』(舊版)第二、p. 286, p. 289.
- (6) 『續群』八下、p. 694.
- (7) 『新訂國史大系』p. 37.
- (8) 『續群』八下、p. 702.
- (9) 同上、p. 703. また『元亨釋書』卷三參照。
- (10) 『佛全』p. 11.
- (11) 『國史大系』p. 628.
- (12) 『大日本史料』第一編之一、寛平三年十月二十九日條、p. 839. また『祕寶園城寺』(講談社刊)には智證大師自筆『制誠文』の寫眞版が載っている。
- (13) 『佛全』智證大師全集、第二、pp. 510~11.

- (14) 福尾猛市郎氏「慈覺門徒と智證門徒の抗争について」(『國城寺の研究』所收)及び柳田暹暎氏「智證大師の御遺誠について」(『天台學報』十五號所載)などに詳論されている。所功氏「『圓珍和尚傳』の素材と構成」(『佛教史學』第十四卷第三號所載)も同様に後世の假託文であるとする。
- (15) 智證大師圓珍の山王三聖信仰については、拙稿「智證大師圓珍の山王信仰」(近刊『智證大師研究論集』所收)を參照。
- (16) 『國史大系』p. 18.
- (17) 同 下、p. 474.
- (18) 『正藏』圖像部 十一、p. 1047a. なお、『沙門壹道記』に「つては、田島德音氏「山王神道と一實神道」(『大正大學々報』二十七輯所載)を參照。沙門壹道は『九院佛閣抄』・『叡岳要記』上の承和十年(八四三)八月十日の定心院供養の條に「梵音壹道」(『叡岳要記』では一道)とあり、また、『叡岳要記』上の貞觀六年(八六四)正月十四日記の慈覺大師如法經事は、この壹道の作である。『三代實錄』の仁和二年(八八六)五月十二日條をみると、壹道は石見國迦摩郡大領伊福部安道が謀反したのに加擔したため、捕えられて還俗させられ、かつ徒一年の刑に處せられてゐる。
- (19) 『大日本古記録』p. 78.
- (20) 『平安遺文』卷十、補六四、pp. 123~24.
- 山王七社の形成(菅原)
- (21) 『續群』二下、p. 588. 及び『國史大系』p. 101.
- (22) 『續群』二下、p. 584.
- (23) 『扶桑明月集』が、大江匡房の撰述であるかどうかは疑問がある。佐藤眞人氏「傳大江匡房撰『扶桑明月集』について」(『神道宗教』第一一八號所載)を參照。
- (24) 『溪嵐拾葉集』(『正藏』七六)卷八、p. 526b.
- (25) 『續群』二下、pp. 585~86.
- (26) 『古事記』(『日本古典文學大系』本) p. 182. 『日本書紀』(『古典文學大系』本) 下、p. 246.
- (27) 『國史大系』p. 127.
- (28) 『本朝月令』(『群書類從』六所收) p. 269. またこの「秦氏本系帳」の文は、『溪嵐拾葉集』卷八(『正藏』p. 529a.)にも、同文を引いてゐる。
- (29) 『校訂古事記傳』(吉川弘文館刊) 二、p. 691.
- (30) 東塔派と西塔派の神祇觀の相違については、前註の近刊拙稿「智證大師圓珍の山王信仰」を參照。
- (31) 『溪嵐拾葉集』(『正藏』七六) p. 526b.
- (32) 同 上。
- (33) 『續群』二下、p. 628.
- (34) 『群書類從』五、p. 550. なお、『耀天記』に引く同傳では、大宮權現の社殿建立を寛平二年でなく三年としてゐる。
- (35) 『群書類從』五、p. 550.

- (36) 同 上¹ p. 549.
- (37) 『扶桑明月集』は『溪嵐拾葉集』(『正藏』七六) 卷八、p. 526b. に收められており、また『神祇宣令』の文も同じく『溪嵐拾葉集』卷八、p. 529b. にある。
- (38) 『續群』二二¹ p. 590.
- (39) 『校訂天台座主記』p. 75.
- (40) 『國史大系』p. 47.
- (41) 『史料大成』p. 333.
- (42) 『續群』二二¹ p. 588.
- (43) 同 上¹ pp. 588~89.
- (44) 『國史大系』p. 101.
- (45) 叡山文庫天海藏『山家要略記』卷一。
- (46) 『溪嵐拾葉集』(『正藏』七六) 卷八、p. 526b.
- (47) 『神祇宣令』は『溪嵐拾葉集』(『正藏』七六) 卷八、p. 529b. に引かれてゐる。『嚴神鈔』(『續群』二二) p. 642.
- (48) 『一實神道記』(天台宗務廳刊) p. 275.
- (49) 『神道大系』神社編日吉、p. 4.
- (50) 十禪師宮にこころは、澁谷亮泰「日吉神社信仰史」下(『神社協會雜誌』第二十八年第九號所載)、及び前掲註(一)の佐藤論文を参照。
- (51) 『續群』二二¹ p. 587.
- (52) 『群書類從』二二¹ p. 502.
- (53) 『天台座主記』p. 75.
- (54) 『續群』二二¹ p. 590.
- (55) 同 上¹ p. 671.
- (56) 『元亨釋書』(『國史大系』本) 卷四、p. 83. 及び卷三十、p. 445. 『天台座主記』p. 54. 『寺門傳記補錄』(『佛全』本) 卷十三¹ p. 327.
- (57) 『元亨釋書』卷四¹ p. 83. 『寺門傳記補錄』卷十三¹ p. 327. その他『扶桑略記』卷二十九、『古今著聞集』卷六、『寺門高僧傳』『天台座主記』『園城寺長史次第』などを参照。
- (58) 『續群』二二¹ p. 646. なお、成陽の傳は未詳である。
- (59) 同 上¹ p. 677.
- (60) 同 上¹ p. 683.
- (61) 同 上¹ p. 686.
- (62) 同 上¹ p. 763. 及び『天台座主記』p. 162.
- (63) 『溪嵐拾葉集』(『正藏』七六) 卷八、p. 526b.
- (64) 『續群』二二¹ p. 590.
- (65) 『天台座主記』p. 80.
- (66) 『國史大系』p. 53.
- (67) 『平安遺文』卷十、pp. 123~24.
- (68) 『天台座主記』p. 88.
- (69) 同 上¹.
- (70) 『國史大系』p. 62.

- (71) 『續群』二下、p. 619.
- (72) 拙稿『耀天記』の成立(『東洋の思想と宗教』創刊號所載)に詳論してゐる。
- (73) 『續群』二下、p. 623.
- (74) 『平安遺文』七、p. 2576.
- (75) 『國史大系』p. 93.
- (76) この争いの原因は、『天台座主記』によると、「件根元者、山上溫室之習、學侶先洗浴、堂衆後替入。而去三月西塔南谷湯治間、堂衆不待前後之次第、依致尅限之違亂。」(p. 134.)とあって、洗浴の順序を違えたことによる。
- (77) 『天台座主記』p. 138.
- (78) 『佛全』p. 43.
- (79) 『山家要略記』卷五、「山王七社北斗星云事」にみえていゝ。なお、佐藤眞人氏「山王神道形成上の一斑——山王七社・北斗七星同體説の成立をめぐって——」(『宗教研究』二六六號所載)を参照。